

### Ⅲ 今後の課題

現在、教育相談に来談する人々が増え、じっくりと継続治療に当ることができないほどになり、心ならずもストップをかけざるを得ない盛況ぶりである。

だれしも、児童・生徒のよりよい成長を望まない者はいないであろう。

知能の程度を知りたい、努力するが学業がふるわない、学習意欲がさっぱりない。病気、家庭の事情その他客観的な理由がないのに登校しない。衝動的で乱暴して困る。集団行動の仲間入りができない。進学や就職に迷い悩んでいる。夜尿で困っている。生理不順を心配している。家出をくりかえす息子をもてあましているなど、教育相談のたねは尽きない。

もちこんでくる相談の内容は、いろんな条件のため情緒不安に陥ったり、内気なため欲求不満がこうずるとか、知能・学業・性格・行動・進路・適性・身体・適性の広範囲にわたって、個人的、家庭の問題、または、学校・社会などの問題など、実際にはいろいろな原因があって、複雑なため診断（指導）は難しい。それにしても、親子関係による問題行動の多いことに驚いている。

教育相談が、これらの問題（現症）に応じ、よりよく成長（解決・治療）するための効果的な助力をあたえることをねらうならば、指示・非指示にこだわらず、個人尊重というカウセリング本来の立場に立って、来談者（通信者を含む）とのあたたかい人間関係をもつことが肝要であろう。

本書にあげた事例は、すべて担当者が相談にあずかったもので、そのひとつひとつに教訓と想出がある。これをもとにしてさらに、教育相談を充実・発展させたいとねがっている。

最後に今後の課題を箇条書的に掲げ、教育相談研究の新しい方向を検討したい。

- 1, 相談内容の複雑多岐
  - 事例の多様性からみて、専門的教養・技術を身につけた担当者を必要としている。
- 2, 教育相談の共通理解
  - 関心が高まり理解も深まってはきているが、まだ、全職員の共通理解はたりない。
- 3, 検査結果の解決活用
  - 諸調査・検査への関心が高く実施はするが、事実の記録と理解にとどまっている。
- 4, 児童・生徒との接触
  - 熱意はあっても、全児童・生徒への接触が不十分で、問題児だけになりやすい。
- 5, 教育相談技術の研修
  - 研修意欲にもえても、研修の機会がたりないので、技術が身につけていない。
- 6, 問題児の早期発見と処置
  - 集団理解のための各種テスト・観察・測定により早期発見、迅速な処置をする。
- 7, 家庭や関係機関との連携
  - 家庭との連絡・学校との協力・関係機関（病院・児童相談所）との連携を密にする。
- 8, 教育相談設備の充実と担当者の増員
  - 教育相談室の内容を充実するために、テレビカメラ、野外遊戯場などを整備する。
  - B級施設にふさわしい職員構成（専任5～6・非常勤2）の検討・改善をすすめる。

担当者 伊藤 武司